

『非核芸術案内』刊行のご報告

岡村 幸宣

二〇一一年三月一日、午後二時四六分。

四月九日に開幕が迫った目黒区美術館の「原爆を視る 一九四五―一九七〇」展に向けて、『原爆の図』の一九五〇年代はじめの全国巡回展をたどる図録原稿をようやくまとめ終え、メールで送信して一息ついたところで、長く、激しく、嫌な予感のする揺れがはじまったのです。

偶然なのか、必然なのか、そのとき丸木美術館で開催していた展覧会は「第五福竜丸事件 ベン・シャーンと丸木夫妻」展。三月五日には、第五福竜丸の元乗組員である大石又七さんと詩人のアーサー・ピナードさんをお迎えして、講演会を行っていました。「誰もが被ばく者になる世界を生きているということをもっと感じてもらいたい」と語る大石さんに、ピナードさんが「私たちは皆、第五福竜丸に乗っている」と応えたことが、ほどなく切実な問題として迫ってこようとは、そのときは思いもよりませんでした。

目黒区美術館の原爆展は中止に追い込まれました。丸木美術館では、緊急企画「チエルノブイリから見えるもの」として、貝原

浩の《風しもの村》をはじめとする原発事故後のチエルノブイリ周辺取材した絵画や写真を展示しました。チエルノブイリの歩んできた二五年は、これから福島が、私たちが向き合わなくてはいけない未来なのではないか。そんな問題提起を込めた企画でした。そして、この企画が好評だったことで、『原爆の図』を所蔵する美術館として、「二・一」後に何ができるか、何をすべきかという方向性が、おぼろげながら見えてきたように思います。

その後も、福島原発の下請け労働者やスリーマイル原発事故を描いた水木しげるのイラストレーション《パイプの森の放浪者》や、新井卓の福島取材した銀板写真のシリーズ、福島で被災した彫刻家・安藤栄作の《光のさなぎ》などの企画を続け、とりわけ、二〇一一年の暮れに開催した芸術集団 Chim↑Pom の個展は、それまで丸木美術館を訪れたことのない大勢の若い世代が、美術館に足を運んでくれました。

はじめから計画的に構想を練っていたわけでは決してなく、むしろ、走りながら考えるという綱渡りの連続だったのですが、気がつけば、この三年間の丸木美術館の企画は、広島から福島にいたるまでの、核の脅威に対峙する芸術表現の歴史を見つめなおすという内容になっていました。

そうした成果を踏まえて、昨夏、今春と二度にわたって東京新聞紙上で「非核芸術案内」を計一回にわたって連載させていただきました。白状してしまえば、「非核芸術案内」というタイトルは、担当の記者が用意して下さったもので、はじめは「非核芸術」という設定自体に、違和感がないわけではありませんでした。しかし、繰り返し使い続けているうちに、このタイトルは、「三・

非核芸術案内

核はどう描かれてきたか



岡村 幸宣

広島・長崎から福島まで

忘却に抗い、核の脅威を視覚化し続けてきた
「非核芸術」の系譜をたどる



わかる、使えまくるはじめの1冊
岩波ブックレット

【カラー図版多数】

定価(本体 600円+税)

「一」後に顕著になった眼差しを示す、重要な意味を持つのではないかと思いなおすようになりました。

これまでも、原爆の絵を集めた画集や展覧会はたびたび企画されてきましたし、それらはそのまま、核(兵器)の使用に反対するという「反核」(Anti-nuclear)の意識と結びついていました。

しかし、「三・一一」後に多くの人に共有されたのは、原子力発電(核の「平和利用」)を含めた核の存在そのものを否定し、あらゆる核が人間と共存できないという「非核」(Non-nuclear)の意識だったように思います。

もちろん、その一方で、核エネルギーを使わなければ繁栄の道はないという大きな声も聞こえてきます。たしかに、核エネルギー

によって繁栄を謳歌する人はいるのでしよう。そして私たちもまた、恩恵の一部を享受しているのかも知れません。しかし、その繁栄の裏側で生じる不条理によって抑圧される側の存在を、もはや見ないふりをしたままでいることは許されぬ。

そうした視点から「非核芸術」の系譜を見つめなおしていくと、それぞれの時代に生じた不条理をいかに可視化するかという意志が、表現の中から浮かび上がってくるのです。「非核芸術」とは、たんに核の脅威に抗するだけではなく、核の保有に価値を置く社会のあり方そのものを再考することであり、すべての人間が人間らしく生き、誰にも抑圧されず、生命を脅かされることのない、普遍的な自由に向けての渴望なのだと思います。

このたび、岩波書店より、ブックレット『非核芸術案内 核はどう描かれてきたか』を刊行させていただきました。わずか六四ページ、しかも図版多数にもかかわらず四苦八苦して情けない限りなのですが、原爆文学研究会の皆さまには、今年四月に福島大学で行われた研究会において発表の機会をいただくなど、たびたび「非核芸術」への考えを深める貴重な教示をいただいたことを、心より御礼を申し上げます。皆さまとの出会いがあれば、このブックレットも出せなかつたでしょう。

「三・一一」から二年半が過ぎた今も、あの日の揺れの余韻の中で生きているのではないか、という思いはずっと続いています。その余韻を抱えながら、次の仕事へと向かっていきたいと思っています。